

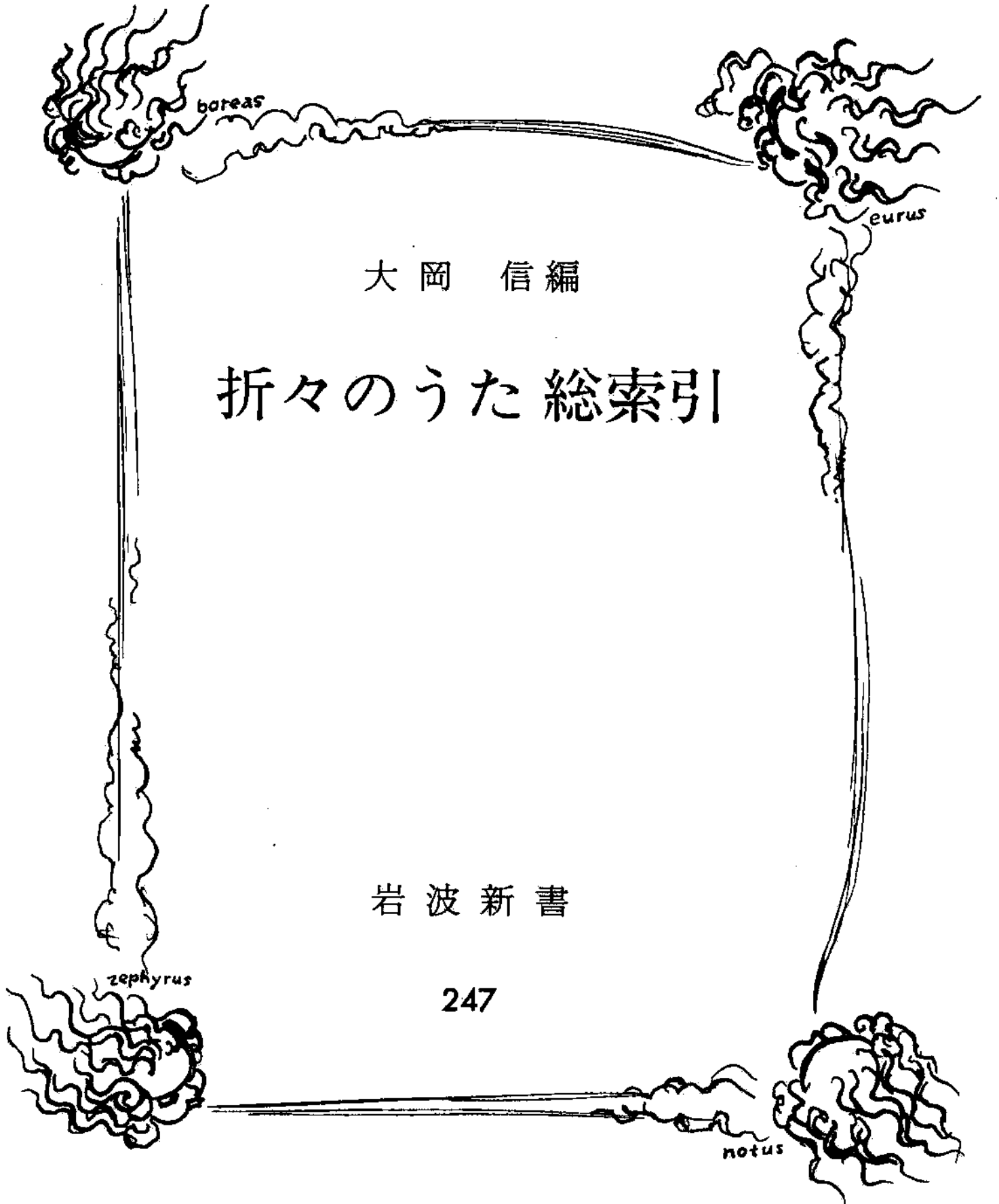
大岡信編

折々のうた総索引



岩波新書

247



大岡 信編

折々のうた 総索引

岩波新書

247

大岡 信

1931年静岡県三島市に生まれる

1953年東京大学文学部卒業

詩人，東京芸術大学教授

詩集—「記憶と現在」「悲歌と祝禱」「春 少女に」
「水府」「草府にて」「詩とはなにか」
「ぬばたまの夜，天の掃除器せまつてくる」
「故郷の水へのメッセージ」「地上楽園の午後」など

著書—「折々のうた」(正・続・第三～第十)
「抽象絵画への招待」「連詩の愉しみ」
(以上，岩波新書)
「現代詩試論」「超現実と抒情」「紀貫之」
「彩耳記」「岡倉天心」「日本詩歌紀行」
「うたげと孤心」「詩の日本語」「表現における近代」
「万葉集」「ヨーロッパで連詩を巻く」
「窪田空穂論」「詩人・菅原道真」
「詩をよむ鍵」「美をひらく扉」
「ヴァンゼー連詩」(共著)「ファザーネン通りの縄ばしご」(共著)
「大岡信著作集」(全15巻)など

他に「文芸カセット・折々のうた」(春・夏・秋・冬，朗読・解説)

折々のうた 総索引

岩波新書(新赤版) 247

1992年9月21日 第1刷発行 ©

編 者 おお おか まこと
 大 岡 信

発 行 者 安 江 良 介

〒101-02 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5
発 行 所 株式会社 岩 波 書 店
 電話 03-3265-4111(案内)

印刷・精興社
定価はカバーに表示してあります 製本・永井製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan
ISBN4-00-430247-1

目次

「折々のうた」の十四年

——序にかえて——

大岡 信

初句索引

作者略歴（兼索引）

「折々のうた」の十四年

——序にかえて——

『折々のうた』が岩波新書版で十冊を数えることになったが、ついでには既刊十冊分の総索引を別に一冊編んではどうか、という岩波書店からの誘いを受けた。

「願ってもないこと、そうしていただきたい」

とおねがいしてこの一冊が実現することになった。私が即座にこの誘いに応じたのは、まずもって私自身にそれが必要だったからである。というのも、朝日新聞紙上での「折々のうた」連載がこれほど長期にわたるとは予想もしていなかったため、当初の間は以前に引いた作品を重ねてまた引くようなことは決してなかったのに、ある時期からのち、一度引用した作品をまた引いて原稿を書くという失敗を、稀れにはあれ冒すようになったからである。

新聞紙上に二度登場してしまった作が、たぶん二、三回ほどあったように記憶する。そのたびに、読者からの知らせで頭を叩いた。新聞社の方でも「これはいかん」とコンピュータに全作品を記録してくれるようになったが、私自身は仕事場で一切そのような装置を持って書いてはいないので、相変らず自分の記憶を頼りに、「これはまだ引いたことがないはず」

と決めて書いている。だから時に失敗する。学芸部でこの欄を担当している上田泰真記者から、何年前の何月何日の分にもう出てました、という、同情・詠嘆まぜこぜの電話がかかってくるものがあって、さすがにがっかりする。それは作者未詳の「よみ人しらず」の作の場合が多いように思われた。

なぜ「よみ人しらず」の作かといえは、新書版各冊巻末についている「作者略歴」欄では「よみ人しらず」の歌が省略されているからである。

私とてもまったく考えなしに作品を選んでいくわけではない。重出にちょっと不安を感じるときは、当然既刊各冊の作者略歴欄にあたってみることにしている。その作業自体、これだけの冊数になるとかなり面倒なことがあるが、それでも大いに助かる。しかし困るのは作者名のない作品の場合。略歴欄にはないから、いちいち全冊をめくってみる必要がある。しかしそれは実際には無理である。そこでその労力をはぶき、記憶と勘を頼りに、「えいッ、大丈夫だろ、まだ書いてないと思うよ」と百八十字の鑑賞文を書いて送ることになる。すると上田さんの困ったような声が返ってくるのが、ごくたまにだが、生じる。

作者名による索引では引くことのできない「よみ人しらず」の短歌などの場合、初句索引あるいは（和歌の場合）四句索引などがあれば、このような失敗も避けられる。

岩波新書編集部から伝えられた総索引作成の意向に対して、私が「願ってもないこと」と思ったのは、以上のような体験にもとづいていた。

著者にとって必要なことは、多かれ少なかれ読者にとっても必要なことであろう。その点で今度の総索引編成は、たいへんありがたいのである。

実をいえば、読者の中には、手書きの私家版でその種の索引を作り、私のところまで送って下さる方々もあった。その都度私はびっくりすると同時に、自分のやっている仕事は何だか空恐ろしいことのようにさえ思われるのだった。それほどにも大きな好意を受けるに値するほどの仕事なのか、と思うためである。

しかし、前述したように、筆者である自分自身でさえ時に困ってしまう事があるのだから、読者が不便を感じていたとて不思議はないと思うようになった。総索引刊行にいたる経緯を申しあげればこの通りである。

さてそこで、新書編集部の坂巻克巳氏は本書の序文を少し長く書けとおっしゃる。新聞紙上での「折々のうた」の開始は一九七九年（昭五四）一月二十五日、すなわち朝日新聞創刊百周年記念日からだった。その時から数えれば、すでに足かけ十四年。岩波新書版『折々のうた』は、一年分ずつを一冊にまとめたものなので、実質でいうとぴったり十年間、このコラムを書いたことになる。

十四年と十年、両者の間に四年近い差があるのは、時々一年間ないし何カ月間かの休載期間があったからである。十年あまりにわたる執筆ないし休載期間中に感じたこと、考えたこ

との要点は、『折々のうた』各巻の「あとがき」にその都度書いてある。私としてはこの「序文」を書くにあたって、実をいえばそれら各巻の「あとがき」を年代順にずらっと並べてみたいと思ったほどである。しかしそれはすでにこの『折々のうた』を読んで下さった読者に対しては失礼なことだろう。さてほかにどんなことが書けるだろう。

そう思ったとき、私はだいじなことを思い出した。現在私は新聞コラムを一九九三年四月末日まで一年間休ませてもらっている。これをも含めて過去に五回休載期間があった。私はその都度、朝日新聞紙上に「休載にあたって」という記事を書いてきた。それらはそれぞれの時点において、私が「折々のうた」をどのような心構えで書いているかを要約している。だいじなことを思い出したといったのはこのことだった。「折々のうた」の十四年」としてそれらを順次引用し、読者諸賢にご覧いただくことは、全体が十四年間の総まとめという性格をもつこの本の序文としては妥当、いやむしろ必要なことではないかと私は思った。

以下、それぞれの文章に発表日時をしるし、このコラムに対する私自身の考えの変遷や、内外の事情の変化を見ていただき、過去の記録としたい。読者のご了承を乞う。

なお、それぞれの文章の題あるいは見出しは、私自身がつけたものもあるはずだが、新聞文章の通例によって、朝日新聞の方でつけてくれたものが多いと記憶する。見出しが長い場合は一部分のみの形で題に引く。

1 波動するはるかなもの（一九八一年一月二十八日付）

まる二年間書きつづけてきた「折々のうた」を一月三十一日付で休載させてもらうことになった。勤め先である明治大学の長期在外研究員として、今春から一年間海外に出るためである。この欄の性質上、手もとにかなり多くの本を常時備えていなければ執筆は不可能なので、外国暮らしとなれば自動的にお休みということにならざるを得ない。小さな欄だが、たぶんその小ささゆえに、私にはその数が実感できないほど多くの読者の目にとまり、愛読していただいたことを、心から有難いと思っている。

一年間の外国暮らしのあとで、はたして自分がどんな心境、どんな意欲をもって帰ってくるものか、今から想像してみても仕方がないが、帰ってきたらまた再開するようという朝日新聞の懇篤な誘いをたびたび受け、またたえず頂戴する未知の読者諸賢の便りを拝見するにつけ、どうもこのまま「ハイでは皆さんさようなら」と切り上げるわけにいかないことだけは、はっきりしてきた。鬼が笑う来年の話だが、外へ出て振り返ってみれば、また新しく思いつくこともあるかもしれない。頭をも少しは休め、いろいろ思いもめぐらせてみて、また再開できるようにになったら、その時はもう少しましなこともできるようにしたいと思っている。

とはいえ、新聞休刊日を除いて一日の休みもない仕事は、数日間の旅行でも大ごとで、さすがにくたびれることでもあった。私は一昨年一月二十五日から「折々のうた」を開始するに当たって、社告の「筆者のことば」に次のように書いた。

「私たちは生活の中で、『これは！』と驚いたり心動かされたりするものに出会う。ささやかな『これは！』が人を生かす力にもなる。私はそれを古今の詩の中に求めてみたい。」

連載の意図は結局これに尽きると言ってよかったが、いざこれを日々の続き具合の中で実現する段になれば、事は幾重にも複雑で工夫を要するものとなることは必定だった。そして実際そうになった。私としては百八十字^{*}という短い文章の範囲内で書くことにもたえず心を尽くさねばならなかったが、それよりも、昨日と今日と明日の、それぞれの作ならびに私の文章のつながり具合に気を配ることの方が、一層緊張することだった。毎日ただ一首の和歌、一首の歌謡、一句の漢詩を取り上げているだけだが、それらを配列している私自身にとっては、前後の見渡しがいとも大きな関心事だったということである。

一首の歌たりとも、それだけで孤立して地上に出現したものはない。なぜならそれは私たちが「心」と呼んでいるものの端的なあらわれであり、そして「心」は、一人と一人の、また一人と何百人、何千人のつながりにおいてしか存在しないものだからである。

そういう考え方が根本にある以上、和歌、俳諧、近代・現代詩、歌謡といった常識的な区分に従って、そのどれかに作品の選択を限定してしまうことはありえなかった。これが

「折々のうた」全体の構成に対する私の基本態度だった。

「折々のうた」連載中に書きあげた『詩の日本語』（中央公論社）という本は、自分が学生だったころから感じつづけていたそういう問題について、いわば理論的な面でひとつのまとめをつけようとしたものだが、苦勞して書いたその本と、新聞連載の「折々のうた」とは、同じ態度から出た二つの試みだった。それだけに、曲がりなりにも連載を二年間続けてこられたことには、言葉では簡単に言い尽くせない感慨がある。

よくきく眼は必要だ

さらに必要なのは

からだのすべてで

はるかなものと内部の波に

同時に感応することだ

こころといふはるかなもの

まなこといふはるかなもの

舌といふ波であるもの

手足といふ波であるもの

ひとはみづから

はるかなものを載せてうごく波であり

波動するはるかなものだ

「豊饒記」という詩の中で私はこういう詩行を書いたが、ここで言っていることは、そのまま日本の詩歌全体を見渡そうとするときの私の態度にほかならなかった。そうやって見れば、はるかな古代の言葉が、私自身の中で波動しているのが感じられるのだった。

書きたいことはたくさんあるが、今はただ、読んでくださった大勢の方々に「どうもありがとう」とのみ言わせていただく。

*新聞紙上では百八十字。当新書版では二百十字まで。

2 出会いの喜びと重圧（一九八四年三月十三日付）

「折々のうた」をしばらくお休みさせてもらうことになった。三月十五日付まで掲載のち、年末まで休み、来年元旦からまた再開する。閉店ではなく、開店休業ということである。一昨年の三月十五日、約一年間の休載のあと再開してから、丸二年間、新聞休刊日以外は一

日の休みもなく書いてきた。それ以前にも、丸二年間連載したので、これで正味四年間、この小さな欄を書きつづけてきたことになる。

休載はひとえに私の側の希望による。小さな欄だが、一日も欠かさず書くのはさすがに疲れることでもある。困ることの第一は、旅先では書けないこと。また取り上げる作品の選択や調べを、だれかに手助けしてもらえらる性質のものではないこと。いつでも手が届くところに、必要な本の一切がなければならぬこと。辞典だけでも、国語辞典や漢和辞典何種類かを含め、常時十数種類を座右におかねばならないこと。その他。

こういう条件の積み重なりは、結果としていつも本に囲まれた生活を生みだし、意識的にも無意識的にも緊張を強いる。何カ月かの無責任な解放の時間がどうしても必要になる。それが開店休業の理由である。何しろ、数日間の旅行に出るだけでも、原稿を書き溜めるのは苦手な私には大ごとで、まして二、三週間外国へ行く必要が生じたりした場合には、時間のやりくり算段に四苦八苦する。

具合のわるいことに、私はこの種の短い文章(百八十字分)を書く心得として、せっぱつまった状態にあえて自分をおくことが必要だと考える人間なのだ。せっぱつまった状態でひらめくものが、短い文章では時に決定的に重要なことがある。その訪れを待つために、あえてぎりぎりの時間まで書かずにといたりする。はた目には何たる愚図か、と見えるかもしれないやり方によって自分を追いこむ。何のことはない、たえず苦しい状態にみずからを置こう

と努めているのである。新聞社からのオートバイが、今ごろ高速道路のどのあたりを疾走しているかを、ありありと感じながら最後の仕上げを急いでいるなんてことはしばしばで、頭脳には時により刺激にもなるが、心臓にはあまりよくないに違いない。休みが必要になるのは当然だ。

しかし、こんなことを書きながら、私には心苦しい思いもある。毎日これを必ず読んでくれる読者の数が、決して少なくなことを、いろいろな機会に思い知らされているからだ。多少は存じあげている美術界の長老クラスの方が、長らく病床にある。毎朝この欄を付き添いの人に切り抜かせて整理し、くり返し読むのを楽しみにしていると、ある時見舞いの人に語ったという。そういう方々は、実際には相当な数に達するのかもしれない。新聞社經由で私が受け取る読者の便りから推してもそう思う。

病気の人だけではない。じつに多種類の読者から、たくさんの方の便りを頂戴した。ごく稀には、見当違いなことで難癖をつけてきた手紙もあった。放置できずにその住所に返事を出したら、名宛人居所不明の付箋がついて戻ってきた。

「折々のうた」を開始した時、つまり五年前の正月、私は社告の「筆者のことば」でこう書いた。

「私たちは生活の中で、『これは！』と驚いたり心動かされたりするものに出会う。ささやかな『これは！』が人を生かす力にもなる。私はそれを古今の詩の中に求めてみたい。」

連載を四年続けてきて、今の私の考えも当時と変わらない。目標として掲げたことは、それなことでも何でもなかった。一方に「生活」があり、他方に「古今の詩」があつて、両者は「これは！」という驚きで結ばれている。この素朴きわまる構図から、どれほどにも複雑な関係が展開する可能性があるから、詩歌というものの不思議さは限りがない。

連載を続けているあいだに、以前には想像もしなかったような新しい出会いの経験もあつた。その一つは、日本語を読む外国人でこの欄を読んでくれる人が、私のごく限られた知り合いの範囲内でも、十指に達するほどいるということである。それぞれがすぐれた感性の持ち主であるこのような人々の中から、日本の古今の詩歌を自国に紹介しようと思ひ立つ人も、やがては現れてくるのではないかと期待する。昨年夏、フランスから三人の日本学を専攻したテレビジョン関係者がやってきて、日本文化紹介番組のための撮影をしていったことがある。「折々のうた」筆者としての私に対してもインタビューの申し込みがあり、こまかな質問をたくさん受けた。彼らにとって、大新聞が第一面に詩歌のための常設コラムを持っているということは、世界的にいつてめざましいことと映っているのだった。それは実際の通りである。

こういう状態になると、私も自分一個の勝手気ままは許されないような気持ちにもなるのだが、しかしここはあえてお許しねがって、しばらくの間ごきげんよろしう。

3 「新聞の一面に詩の連載が……」(一九八六年十二月二十七日付)

元日の朝刊からしばらくの間「折々のうた」の連載を休ませていただくことにした。一九七九年から始めた連載がこんなに長く続くものになるうとは、私の夢にも予想しないことだったが、今までにも間に二回休憩させてもらったことがある。この欄は新聞休刊日を除くすべての日に掲載されるので、私の能力をもってしては丸二年間の全力疾走が限度、しばらく息を整えてからまた再開ということにせざるを得ない。言ってみれば、毎日新たにスタート・ラインに戻っては百メートル障害競走をくり返すような仕事であるため、マラソン・ランナーとはまた違った息の調整が必要であるらしい。

川の瀬に立つ一つ岩乗り越ゆと水たのしげに乗り越えやまぬ

窪田空穂

人間のする日々の営みが、この歌にうたわれている水のような具合にはいかなひのは、致し方ないこととはいえ残念なことである。考えてみれば、自然界というものには人間がもつような「疲労」という現象はない。木の葉が枯れて落ちるのも、疲労ではなく、必然である。人が自然界に深い慰めと活力の源泉を見出す理由もそこにあるう。

とはいえ、「折々のうた」の仕事は、疲労に倍する楽しみと発見の喜びを私自身に恵んでくれるので、実際のところ休載などということなしにすませられるならどれほどいいだろうかと思う。しかし私はこの仕事以外にもなすべき事を持っていて、それらもまた、私自身にとってはいさばきわめて重要なものなので、「折々のうた」の仕事との折り合いをつけるのがなかなか大変になる。これも前掲の空穂の歌同様「折々のうた」で数カ月前に引いたものだが、坂本龍馬の次の歌にはそんなわけで不思議な愛着と共感をおぼえる。

「淀川をさかのぼりて」と詞書のある歌――

藤の花今をさかりと咲きつれど船いそがれて見返りもせず

坂本龍馬

私は今、この原稿をパリで書いている。これが新聞にのころには日本に帰っているはずだが、「折々のうた」に関することに話題を限っていえば、この欄の存在がフランスの、また西ドイツやオランダなどの多少とも日本に関心を持っている――そしてその数は飛躍的にふえている――文学者や編集者やラジオ・テレビ関係者のあいだで、一種の驚きとともに語られていることは、その当事者であるだけに何とも印象的なことである。

何に対して彼らが驚いているかといえ、ば、「大新聞の第一面に毎日詩が一つずつのっている」という事実に対してである。詩人たちは私に、「本当か」ときく。足かけ八年前から続け